

第469回5月28日開催
出席委員（50音順・敬称略）

朝野 富三 荒巻 裕
大村 英昭 木下 明美
黒田 勇 櫻井 美幸
森 輝彦
書面参加
倉光弘己

テレビ番組「西日本8局特番～ボクたちの幸福論」
5月3日（金）午前10時20分～11時15分 放送分

櫻井委員

誰の目から見た子供の幸せなのか、もう一つ自分の中で消化し切れない部分があった。

ただ伝えたいものが瞬間の子供たちの目のきらめきだとすれば、それは十分に成功していたのではないか。

今後8局の「競作」ではなく「共作」という形での番組作りも考えてみてはどうか。

朝野委員

もっとじっくり見たいと思う素材がたくさんあったが、それぞれの時間が短すぎて物足りないと言うか、正直もったいないなという感じがした。

企画自体は非常に良いので、8局のリレー方式で全体として1本にまとめるという作り方もあっていいと思う。

木下委員

時間がたつのを忘れさせるような番組だった。特に、両足が義足の小学生の真剣な眼差しには本当に圧倒された。

大人にとっては厳しい時代。そんな中で、けなげに一生懸命頑張っている子供たちの姿を見て、ある意味で大人にとっての癒し番組だと思った。

荒巻委員

番組を見ながら一番強く感じたのは、子供たちの幸せも親御さんや周囲の大人たちの努力があって初めてつかめるものだという事だ。そしてなによりも、子供たちに子供たちなりの生き方を選択するチャンスを与えるのも大人なのだ。

黒田委員

水準を超えた作品だと認めるが、やはり突っ込み不足は否めない。子供たちの「非日常」をとらえるのではなく、逆に子供たちのある意味で耐えられないような「日常」をとらえるという発想の転換も必要ではないか。

放送文化は今変化の時代にあるので、こういう時こそチャレンジ精神、思い切った企画が大切だと思う。

大村副委員長

私も非常に気になっているのは「普通の子供の生きづらさ」である。今の子供たちは、目の前に多様な可能性があるように見えて、実は敷かれたレールの上に単に乗せられてしまうだけなのではないか。

普通の子供の生きづらさの中から、幸せの形を探するという企画もぜひ考えてほしい。

森委員長

時間的な制約がある中で、それぞれのストーリーにそれぞれの輝きがあったと思う。

ただ今のゆとり教育の中で、子供たちはどう生きていったらいいのか、また大人が子供たちをどう社会化しようとしているのか、全体のまとめとしてスタジオから発信すべきではなかったか。

倉光委員（書面）

子供にとっての幸せは、幸福かどうか何も考えなくてすむことだと思う。むしろ子供から大人に移る過程が問題で、ひきこもりの例でもわかるとおり、最大の不幸は他人から無視される状態である。普段そういった学生を相手にしているので、次はもう少し年齢の高い人たちの幸福論を番組にしてほしい。

「メディア規制関連法案」への対応について

先月の番組審議会で審議した「メディア規制法案」の国会審議の経過などについて柳瀬社長が報告した。